

教育研究業績書

2025年10月20日

所属：英語グローバル学科

資格：教授

氏名：三浦 秀松

研究分野	研究内容のキーワード
言語学、英語学、日本語学、英語教育学	統語論、意味論、音声学、英語教育
学位	最終学歴
Ph.D. (Linguistics)	ニューヨーク州立大学大学院言語学部博士課程修了 (Ph.D取得)

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 学科独自のeポートフォリオ（「学生カードシステム」）の構築	2010年4月18日～現在	「学生カードシステム」は、10年前の開発当初は、学科で開発した文法診断テストの保管場所として開始された。その後、eポートフォリオとして再定義され、学生の各種データを保管することになり、現在では、スピーキング動画やライティングサンプル、卒業論文など、学生の学修成果が蓄積されたeポートフォリオとして整備している。英語多読図書の記録機能や学修成果のダウンロード機能など、毎年、改善を続けている。2021年度からは、学生が毎日の英語学習の記録を回答し、そのデータも表示されるようになっている。このシステムにより、学生は定期的に自分の学びを振り返ることができる。
2. さらなる教育の質向上の提案	2010年4月17日～現在	2019年度に新規の提案を行った。本学の特色の一つであるMUSC留学をより効果的にするための新たな英語表現集の作成を学科の先生方と協力して提案した（再検討中）。
3. FD委員会授業公開科目への登録	2010年4月16日～現在	FD授業公開推奨科目として、大英ACEプログラムの学生を対象にした科目（「英語学入門」）の授業公開を行った。ACE学生対象のため全て英語で講義を行っている科目である。公開授業に参加した方からは有意義なフィードバックを頂いた。
4. 学内FD研修会参加	2010年4月15日～現在	FD委員会が主催する勉強会には可能な限り出席している。比較的最近参加した研修会は2019年3月1日に開催された『いかにして学生の理解が深まり、学習効果が高まるのか』という勉強会である。学外のFD研修に参加した先生によるプレゼンがあり、他の参加者とグループワークを行い、KJ法などの練習を行った。過去には、評価ループリックに関するFD研修会にも参加し、現在でも、研修会で学んだ内容を活かし、自分の評価ループリックの改善とループリックを活用したよろよい授業実践に努めている。
5. 授業アンケート結果に基づく授業方法改善	2010年4月14日～現在	授業アンケートは受講生から非常に重要な指摘を貰える機会であるため、アンケート期間終了直後に確認し、すぐに学生にフィードバックを与えていた。学生からの指摘は可能な限り次の担当授業から反映させるように努めている。
6. 異なる科目間での教材のシェア	2010年4月13日～現在	ほとんどの場合、各科目で異なるテキストが指定されているが、異なる科目間で共通の教材を用いることが教育上効果的であると考えている。同じ教材を異なる角度から読み込むことができるために、より深い理解につながる。例えば、リーディング科目で内容の把握が終わっている文章を文法科目で文法形式の角度から改めて見直すことで、より文法的な形式に注目させることができ、次に別の英文を読む際に、以前にまして文法形式に着目したより正確な読みにつながることが期待できる。リーディング科目では多読など早く多く読むことに主眼が置かれがあるため、読みの正確さという面を補っていると考えている。
7. （最初から）教えない授業の実践	2010年4月12日～現在	特にTOEIC演習のクラスで取り入れている手法である。答えや答えに至る道筋を教員が教えるのではなく

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. 協同学習の活用	2010年4月11日～現在	く、グループワーク形式で、なぜ正答が正答なのか、間違いの選択肢はどのように間違いとして排除されるのかグループで議論させる。議論の結果を紙に書いて提出させ、口頭でも発表させる。必要に応じて教員が補足や訂正を行う。 教員が授業内でしゃべる時間を減らし、学生同士のペアワークやグループワークなど協同学習に最大限時間を配分するように意識している。また同時に、協同学習での成果はクラス全体でシェアすることで、協同活動の成果や結果を放置することのないように配慮している。欠席者がいるためペアやグループはその場その場で作成する必要があり、また学生任せにすると意図しない行動や状況が発生することがあるため、クラスマネージメントが非常に重要である。また、協同学習は、良い意味でのピア・プレッシャーが生まれることが利点の一つである。授業で一人ひとりを指名するやり方であれば、準備不足により本人が恥をかくなりそれなりの経験をするだけだが、協同学習であれば相手やグループメンバーに迷惑をかけることになるので、良い意味でのプレッシャーとして事前準備をしっかりとくるようになっていると感じる。
9. ICTの活用 (2) Google Classroom	2010年4月10日～現在	Google Classroomが正式に導入されたことを受けて、ほぼ全てのクラスで活用している。導入前は確認・記録のために提出物を全てスキャンするというようなことをしていたが、その必要がなくなり、教育上の効率が高まったと考えている。
10. ICTの活用 (1) スマホの活用	2010年4月9日～現在	学生がほぼ100%スマートフォンを携帯しているため、スマホを排除するのではなく、逆に、授業で積極的に活用するようにしている。特に利用しているのはボイスメモの機能で、自分自身の英文の音読を自分で録音させて、その場で録音した自分の英語音読を聞かせることで自分がどんな英語を話しているのか客観的に把握できるようにしている。場合によっては、メール添付で音声ファイルを回収し授業後に確認するなどしている。ボイスメモであれば音声だけであるが、ペアになってお互いに動画で撮影されることにより、口の動きや表情までも確認することができる。このようにスマホの機能を利用することで自分のレベルや学習状況を客観的に見ることができる。
11. 小テストの毎回実施	2010年4月8日～現在	ほぼ全ての授業で冒頭に小テストを実施している。目的は、前回の授業の内容を思い出し、その日の授業内容に効果的に接続するためである。また、例えば点呼式の出席調査の場合、点呼の時間は出席調査以外の意味はないが、小テストで出欠調査を兼ねることで授業を効率的にできる効果もある。「小」テストと言っても、毎週テストをするとなると、事前のテスト作成と評価入力などかなりの手間が発生するが、授業の冒頭に多少の緊張感も生まれ、手間以上の効果があるものと考えている。また一度作成すれば使い回しができるケースも多い。定期試験の一回だけの評価から平常点評価中心へ移行している現在の教育上の動向を考えてもそれを先取りした実践であると考えている。
12. 英語による授業の徹底 (ACE)	2010年4月7日～現在	2010年4月の着任以来、毎年ACE (Advanced Course in English) プログラム所属学生の科目を担当してきている。ACE科目は原則全て英語で授業を行うことになっているが、ACE科目を日本人が担当する場合、教員も学生も日本人ということで、どうしても授業の中で日本語が出やすくなる側面がある。しかし、ACEプログラムの趣旨を考え、学生からの質問など授業外での対応を除き、授業内では全て英語での授業を徹底している。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
13. 課題事前提出制の完全実施	2010年4月6日～現在	一方で、英語で全て行うと、日本語で行えば10の内容ができる時に、どうしても6～7ほど内容しかできない。これは英語で授業を行うことに関して広く知られている事実である。このことを考えると、ACE科目以外にも英語のみの授業（English Only）を広げるのが本当に全体として効率の良い英語教育と言えるのかについては極めて難しい問題と認識している。 宿題などを課して授業に持ってこさせることは一般的だが、授業で集め次の授業で返却となると、学生の学習からフィードバックまで（少なくとも）1週間のタイムラグが発生することになる。また、この方式だと全15回のうち最大6～7回しか課題をだせないことになる。フィードバックは早ければ早いほど効果的であることと、課題提出を毎週課すために、毎週、授業の2日前に課題を提出させ、授業内で返却する仕組みにしてある。これによりほぼ毎回学生に授業外の課題をさせることができる。学生は授業以外に提出物を提出しに所定の場所に来なければならないが、効率的であることを理解してくれているようで特に不満を述べる学生はない。また、現在ではGoogle Classroomを利用してオンラインで提出できるようになってるので、学生にとっても教員にとっても課題の事前提出に際しての利便性はかなり向上している。
14. ポスター発表形式プレゼン（卒業演習<ゼミ>）	2010年4月5日～現在	レジュメ配布方式では発表者もオーディエンスも下に向いてしまうため、そうではなく、ホワイトボードに発表資料を作成させるポスター発表形式でプレゼンを行わせ、オーディエンスとのアイコンタクトなども重視した発表の練習をさせている。全面がホワイトボードになっているLearning Commons（本学図書館6階）の教室形態を充分に活用した授業となっている。
15. 講義科目クラスレポート提出・返却と小テスト（科目：『英語の歴史AB』）	2010年4月4日～現在	講義科目では、講義の内容をA4のルーズリーフにレポートさせ、クラス終了時に提出させてている。講義をぼんやり聞いているだけで、ノートを取ることを何もせず、何も考えずに授業終了を迎えることのないよう、学生に能動的に受講させる工夫である。講義の内容だけでなく、講義を聞いて感じた疑問点などをレポートに書き込ませることで、学生とレポートを通してコミュニケーションをとることも可能となる。回収後は全て確認してからスタンプを押して返却する。また、翌週にはレポートした講義内容に基づく小テストをクラスの冒頭で実施する。
16. 日英対照ランキングリストの作成・配布（科目：『アクティヴ・グラマーAB』）	2010年4月3日～現在	学習者のインプットとアウトプットのバランスを考えた授業展開を常に意識している。その一環として、授業で使用する英文テキストに登場する英語を見て分かる、つまり「受容」としてだけではなく、「発信」できる知識にまで高めるため、日英表現対照リストを独自に作成・配布し、小テストを行っている。小テストはペーパーテストとオーラルテストの両方を実施している。オーラルについては、1分間でいくつのチャンクを言えるか、一人ひとり教卓に来てもらって、口頭試験をしている。
17. スピーチ動画配信によるリフレクション課題（科目：『アクティヴ・グラマーAB』）	2010年4月2日～現在	学生が授業で行うスピーチは、ビデオ撮影し、一人ひとりの動画として別々にファイルを切り出し、Google Classroomで配信している。また、自分の動画を見てリフレクションペーパーに記入・提出させている。ビデオを実際に見た上でリフレクションペーパーを書いたことの証明として、動画で開始1分の時点でなんと言っているか英単語数語を書くことを義務付けている（この部分を書いていない場合は評価対象外）。「スピーチを行った感想」ではなく、時間をおいて改めて

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
18. 独自3ラウンド英語学習法の実践（科目：『アクティヴ・グラマーAB』）	2010年4月1日～現在	自分のスピーチを見ることで、学生が次のスピーチに向けて「客観的に自分のスピーチの振り返りをする」ことを主眼としている。 一つの教材をインプットからアウトプットまで多層的な英語学習になるように設計して授業をしている。第1週は英文の内容理解と発音チェック、第2週は英文を利用した小テスト（チャンキングのクイックレスポンス、音読、シャドーイング）、第3週は英文の要約を中心とする1分半のスピーチを行う。Google Classroomで毎週課題を与え、返却時には簡単なフィードバックをしている。学びの主体を教師から生徒・学生に少しずつ移していく教育モデルが「責任の移行モデル」と近年呼ばれ注目されているが、そのモデルを先取りした授業実践と考えている。また、日本の英語教育界では、同じ教材を異なる角度から複数回利用する授業スタイルを「ラウンド制」と呼ぶことがあるが、そちらのモデルも取り入れた授業実践となっている。
2 作成した教科書、教材		
1. Thinking about Human Life and Society (Nan'undo)	2023年2月7日	社会で問題を抱えている人が幸せに暮らせるような未来の実現に向けて取り組んでいる研究者たちの実践について書かれた英文に練習問題を付した教材で、練習問題の作成を担当した。
2. 専門科目「TOEIC/TOEFL演習II（2年後期）」語彙小テスト	2021年9月	2年生後期の必修科目にも語彙テストを作成した。『新TOEICテスト英単語・熟語マスター2000』（旺文社）を利用して独自の語彙小テストを作成した。現在、「TOEIC/TOEFL演習II」を担当する全教員が利用する予定になっている。
3. 専門科目「TOEIC/TOEFL演習III（3年前期）」語彙小テスト	2016年4月～	『新TOEICテスト英単語・熟語マスター2000』（旺文社）を利用して独自の語彙小テストを作成した。現在、「TOEIC/TOEFL演習III」を担当する全教員が利用している。
4. 『地球の歴史ものがたり』（英宝社） (Christopher Lloyd著: What on Earth Happened)	2014年1月20日	Christopher Lloyd氏の“What on Earth Happened”から近現代史を採録し、編集・注釈を行った上で練習問題を作成し英宝社から出版した英語リーディング教材である。レベルは高めで、目安はTOEIC730点程度以上となっている。
5. 『現代英語学へのアプローチ』（英宝社）	2014年1月	第6章「英語の地球的拡散」を執筆した。大英第2系選択必修科目「英語の歴史AB」でテキストとして指定して使っている。英語史や現在注目されている世界英語（World Englishes）に関する記述が多く、英語の歴史的背景を身に着けさせるには格好のテキストとなっているよう思う。
6. 日英対照チャンキングリスト（解答編）	2010年4月2日～	授業で使う英文から、学生が英語を書いたり話したりする際に使えるチャンクを抜き出した日英対照リストを作り、課題として日本語だけが入った用紙を渡し、対応する英語チャンクを英文から探して記入させる。その課題の解答編。
7. 日英対照チャンキングリスト（課題用空欄付き）	2010年4月～	授業で使う英文から、学生が英語を書いたり話したりする際に使えるチャンクを抜き出した日英対照リストを作り、課題として日本語だけが入った用紙を渡し、対応する英語チャンクを英文から探して記入させる。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 高等学校での教員経験	2010年4月	「職務上の実績に関する事項」に記載の通り、中学校と高等学校の教員免許を取得しており、実際に数年間高等学校で教鞭をとった経験がある。所属している学科では、教職を目指す学生も多く、また教職関連科目を担当していることもあり、教職課程履修学生には自分の経験も交えた指導をするよう心がけている。
4 その他		
1. 付属中高との連携（3）	2020年2月	2019年2月と同じトピック・授業構成で、内容をアップ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
2. 付属中高との連携（2）	2019年2月	データして実施した。 付属高校との高大接続に積極的に取り組んでいる。武庫川女子大学付属高校3年対象入学前教育として、最近では、2019年2月に授業を行った。次年度学科入学予定の付属高校3年生に対してインターネットを活用した英語力向上のためのネット検索に関する演習の授業を行った（講義タイトル『英語コーパスを使ってみよう』）。グーグル検索をコーパスに見立てて、ダブルクオーテーションを使った「完全一致検索」、その中にアスタリスクを組み込んだ「ワイルドカード検索」、精度の高い検索のための「ドメイン指定検索」の3つを教えて練習させるなどし、入学後にも活かせる知識を伝え、簡単な演習を行った。
3. 英語学習相談室の相談員	2018年4月	全学の学生を対象にLL教室が設けている「英語学習相談室」の相談員として、他学科の学生も含め、英語学習の相談を担当している。
4. 付属中高との連携（1）	2010年4月1日～現在	入学予定の付属高校3年生に対する導入教育として英語学について講義を行った。講義に入る前に事前にクイズ・アンケートを実施し、質問に答える形で、英語学を構成する諸分野の紹介、それぞれの分野での研究対象の紹介などをアクティブ・ラーニング形式で行った。
5. 担任業務	2010年4月～現在	武庫川女子大学は他大学に先駆けて担任制を導入し今に至っており、担任制の下で、きめ細かい教育的な指導を受けられるということで本学を選ぶ保護者も少なくないと認識している。以上のような認識のもと、担任をしている学生から相談があった場合は素早く適切に対応するように務めている。必要に応じて保護者とも直接連絡を取りながら誠実な対応を心がけている。
6. 学生の勉学・進路などへの対応	2010年4月～現在	クラス担任として、またゼミ担当として、学生からの各種相談に対応している。必要に応じて保護者に連絡を行い、保護者との緊密な連携の元で学生のケアができるよう努めている。
7. キャリア支援	2010年4月～現在	初期演習などの時間に行われるキャリアガイダンスには積極的に講師や担当者と話し合いを行っている。例えば、学生にとってどのような情報が重要か、どのような点に配慮してほしいかなどについてである。ゼミ担当としては、自分のゼミ生がMUSESへの登録を確実に行っているかなど適宜確認をしたり、就職関連の相談に対応し、学生の就職支援を行っている。
8. 学友会活動などへの学生支援	2010年4月～現在	学生委員であった2010年度2011年度は担当委員として特に積極的に学生支援を行っていたが、それ以降も、担任として学友会主催の活動には積極的に取り組んできた。また、幹事懇談会にも毎回出席し、学生の学生生活がより良いものになるよう努めている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 中学校教諭専修免許状（英語）及び高等学校教諭専修免許状（英語）	1996年3月	大学院で中学校教諭専修免許状（英語）及び高等学校教諭専修免許状（英語）を取得している。実際に高等学校で英語を教えた経験もあり、高校と大学の接続を意識した英語教育の実践に努めている。
2. 中学校教諭免許状（英語）及び高等学校教諭免許状（英語）	1994年3月	中学校教諭免許状（英語）及び高等学校教諭免許状（英語）を取得している。実際に高等学校で英語を教えた経験もあり、高校と大学の接続を意識した英語教育の実践に努めている。
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

職務上の実績に関する事項					
事項	年月日	概要			
3 実務の経験を有する者についての特記事項					
4 その他					
1.国際化専門委員	2019年4月2020年3月	国際化専門委員として会議に参加し、本学の国際化に向けて積極的な発言を行った。			
2.教育懇談会（福岡会場）	2018年9月	教育懇談会福岡会場に参加し、保護者と懇談を行った。			
3.オープンキャンパスミニ講義	2018年8月10日	「同音異義語」についてミニ講義を行った。日本語の同音異義語から始めて、同音異義を利用して非常に奇妙な文が作れるということなどを紹介した（例えば、"buffalo buffalo buffalo buffalo buffalo buffalo buffalo."という連鎖が同音異義に着目すると意味のある文として解釈できることをお話した）。			
4.入試担当委員	2018年4月～2021年3月	入試業務を担当した。			
5.学内人権委員会 委員	2018年4月～2019年3月	2018年8月8日に「社会福祉法人 ゆうわ福祉会鈴蘭台事業所」で行われた人権委員会の実地研修に参加し、人権に関する議論・啓蒙活動に参加した。			
6.教育懇談会（高松会場）	2015年9月	高松会場の教育懇談会に参加し、保護者と懇談を行った。			
7.教務委員会 委員	2015年4月～2018年3月	英文教務委員として学科内の種々様々な教務的な事案に対処した。また教務委員会と学科をつなぐリエゾンとして活動した。			
8.高校への出前授業（大阪府立山本高等学校）	2014年11月21日	『英語学入門』というタイトルのもと、高校生が対象なので英語学に関する初步的な内容で実施した。英語学では何をどの様に考えて議論を展開していくか、アクティブ・ラーニング形式で講義を行った。			
9.教育懇談会（高松会場）	2014年9月	教育懇談会高松会場に参加し、保護者と懇談を行った。			
10.高校への出前授業（大阪私立上宮高校）	2013年12月19日	『英語を分解する（英語学入門）』というタイトルで模擬授業を担当した。題材にはun-という英語の接頭辞を使い、この接頭辞を付けることができる単語とできない単語の違いについてどの様に議論が可能かアクティブ・ラーニング形式で授業を行った。			
11.オープンキャンパスミニ講義	2013年8月10日	『英語を分解する（英語学入門）』というタイトルで模擬授業を担当した。高校生が対象なので英語の形態論に関する初步的な内容で実施した。un-という英語の接頭辞を付けることができる単語と出来ない単語の違いについて、違いをどうやったら説明ができるか、順を追って議論の展開を紹介した。			
12.教育懇談会（高松会場）	2013年8月	教育懇談会高松会場に参加し、保護者と懇談を行った。			
13.学内FD委員会 副委員長	2013年4月～2016年3月	FD委員会委員長を補佐しながら副委員長として3年間活動を行った。3年間の集大成として、学内の先生方から集まった授業の工夫や失敗例を『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』として冊子にまとめた。			
14.学内共通教育委員会 委員	2013年4月～2015年3月	共通教育委員会と学科をつなぐリエゾンとして活動した。また「共通教育ニュース」の編集委員としても活動を行った。			
15.学内学生委員会 委員	2011年4月～2013年3月	共通教育委員会と学科をつなぐリエゾンとして活動した。			
16.教育懇談会（高松会場）	2010年9月	教育懇談会高松会場に参加し、保護者と懇談を行った。			
17.入試担当委員	2010年4月～2015年3月	入試業務を担当した。			
18.学内FD委員会 委員	2010年4月～2012年3月	FD委員会と学科をつなぐリエゾンとして活動した。			

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.『現代英語学へのアプローチ』	共	2014年1月15日	山内信幸、北林利治（編著）東京：英宝社。	英語学初学者を対象とした入門書を作成した。世界語となった英語の現状についての概説から始まり、これから英語学を目指す者が知っておくべき内容を、ほぼ全ての分野に関して網羅している。同書の中で、第9章「英語の地球的拡散」を三浦が担当した。9章では、ピジン・クレオール、インド英語、シンガポール英語、日本人英語の特徴、日本語に入った英語（カタカナ語）など、世界中で話され、使われている多様な英語について概説している。
2 学位論文				
1.Grammatical Relations, Reflexives and Pseudo-raising in Japanese	単	2008年5月	ニューヨーク州立大学	ニューヨーク州立大学言語学部大学院に提出した学位論文である。「役割と参照文法（Role and Reference Grammar; Van Valin and LaPolla 1997）」を枠組みとして利用し、英語と日本語の「文法関係」、「再帰構文」、「（擬似）上昇構文」をそれぞれ分析した。主に日本語と英語を中心とした対照研究となっている。
3 学術論文				
1.大学・短大1年生の英語4技能に関する学習行動について（投稿予定）	単	2022年3月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 第29号	筆者の所属する学科（[大学]英語文化学科・[短大]英語キャリア・コミュニケーション学科）に2021年4月に入学した1年生224人を対象に、英語の学習記録を3ヶ月間毎日記録させ、結果をGoogle Formで回答として毎日送信させた。3ヶ月分のデータに見られる学習量、学習態度、各種相関を分析した結果について議論を行う。今後のより優れた学習支援策を検討する上で基礎資料になると期待される。
2.英語There構文の文法関係再考（投稿予定）	単	2022年3月	Mukogawa Literary Review	英語のThere構文は、動詞後の名詞句に見られる定表現制約など、同構文が示す様々な特徴から長らく注目されてきている。一方で、同構文には、通常一つしか無い文法関係が二つあるという特殊性をもつにもかかわらず、著者の知る範囲において、この文法関係の特性に関して詳細に検討した研究が見当たらない。本構文の全貌を理解する上で、また文法関係論の議論を深める上でも欠かせない検討課題である。文法関係は、言語という大きなレベルで決まるとするマクロな視点ではなく、構文ごとに決定されるというミクロな視点から分析されるべきであることを論じる。
3.英語学習ポートフォリオの導入意義と開発に関する一考察（査読付）	単	2021年7月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 第28号	1990年代から学習ポートフォリオへの関心が徐々に高まりつつある。本稿では特に英語学習に関して学習ポートフォリオの導入にどのような意義があるのか論じている。日本の英語学習環境はEFLであり、授業時間だけでは英語学習に必要な総時間に満たないため、英語学習環境の改善論を教授論から学習論へ視野を広げる必要があることを指摘する。そして、学習支援として英語学習ポートフォリオが有力なツールになり得ること、これまでの関心の推移、導入の現状について考察している。ケーススタディとして、著者所属の学科で独自に開発している英語学習ポートフォリオについてこれまでの経過及び今後の展望も併せて紹介している。
4.On Further Advancement of Linguistic Americanization (査読付)	単	2020年3月	武庫川女子大学紀要 第67巻 pp. 21-30.	2019年度武庫川女子大学英文学会で発表した内容をさらに深め、アメリカ英語の世界諸英語（"World Englishes"）への影響について、コーパスのデータを元に、過去10年間という比較的短期の変化と過去50年間以上の長期的な変化について考察している。また、世界規模のアメリカ英語化については近年多くの研究があるが、多くがスペリングや語彙のレベルに注目しており、本研究では句のレベルに注目している点で他の研究と補完する関係にあることを論じている。
5.産学連携によるグローカル人材の育成～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～	共	2020年2月	第4回研究成果の社会還元促進に関する発表会 資料 (pp. 25-32.) (武庫川女子大学教育研究社会連携推進室)	本稿は、産学連携により地元企業の英語事情を汲んだグローカル人材育成を目指す取り組みの実践報告論文である。長年に渡って本学科で行われてきた「就職セミナー」と「日米企業研修」、そして、現在展開を検討中の「サービスラーニング」の3つを、「キャリア教育」としていかに有機的に接合することができるか論じている。また、学業面での学習成果のみならず、学生のキャリアに関する学修成果もeポートフォリオ（「学習カードシステム」）に組織化することで、これまで以上に学生のエンプロイアビリティーを向上させることを目的に、今後の総合的な学科教育の発展と展望を論じている。 《共著者：三宅弘晃、三浦秀松、山田慎人、宇佐美彰規、辻和成》 《三浦担当：eポートフォリオ（「学習カードシステム」）執筆担

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6. 英語の統語的序数について（査読付）	単	2019年2月	『ことばとの対話』（英宝社） pp. 139-150.	当、及び、プロジェクト全体への協力と助言》 英語の序数にthe fifth candidateのような形態的序数とcandidate fiveのような統語的序数が存在することを指摘し、正面から論じられることの少ない、後者について考察した。形態論、言語類型論、言語獲得論などのデータを基に常に基数から序数が派生していることを指摘し、形態的序数から統語的序数を導こうとする従来の分析の問題点を指摘し、独自の移動分析を提案した。分析が正しければ、現代英語にも名詞上昇現象が存在し、また名詞上昇は軽名詞に限られないという二点を併せて指摘した。
7. Focus-driven Semantic Reflexivity in Japanese（査読付）	単	2012年	Grammar In Cross -Linguistic Perspective. Teruhiko Ishiguro&Kang Kwong Luke(eds.) pp.89-124. Bern : Peter Lang.	日本語と英語に関して再帰代名詞が目的語として動詞の直後にこれないケースについて、表面上同じ文法現象に見えるものが実は異なる原理に基づくものであり、フォーカス（焦点）という情報構造が異なることによる文法現象であることを論じた英語と日本語の比較言語学研究である。
8. インターネットを併用した入学前教育の実践	共	2010年10月	徳島文理大学研究紀要 第80号 pp. 107-111.	進学率の上昇と少子化が重なり、大学に入学してくる学生の学力低下が問題視されるようになった。入学後にリメディアル教育を行うのはどの大学でも当然のように実施されているが、本研究では、入学後ではなく入学以前に着目した。現在ではインターネットが広く普及しているため、オンラインでの教育も以前に比べて遙かに実施しやすくなっている。そのためインターネットを活用してリメディアル教育を入学前から実施できないか、またどのようにすれば効率的に実施が可能かを論じている。 《共著者：水ノ上 智邦、南波 浩史、三浦秀松、清澄 良策、松村 豊大、笹岡 良二》
9. 英語・日本語・韓国語に見られる單文再帰構文の対照研究（査読付）	単	2010年7月	『交流は海峡をこえて一文化と文学、そしてことば一』岡地ナホヒロ（編著）pp.97-115. 岡山：ふくろう出版	《三浦担当：文章校正、及び、プロジェクト全体への協力と助言》 日・英・韓の3つの言語を比較対照することで、三浦（2004）で報告した「反換喻性（Antimetonymy）」の現象が、日本語だけに見られる特殊な言語現象ではないことを論じた。日本語に見られる再帰構文の特徴が韓国語にも見られ、これが日本語と同じ原理（「反換喻性」（Antimetonymy））に基づくものであり、英語に働いている原理とは異なることを論じた。[英語] vs. [日本語・韓国語]という類型があることを示した類型論の論文である。
10. コンパクトシティ教育拠点構想における実践英語能力ステップアッププログラム	共	2010年3月	徳島文理大学短期大学部 社会人学び直しプログラム推進委員会	本稿は、3年間の文部科学省委託事業（「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託業務（整理番号1335）」）の最終年度（平成21年度）の事業成果報告書である。本事業では、地域社会に広く英語教育の学び直しの機会を提供する目的で、（1）同時通訳集中講座、（2）社会人対象TOEIC集中講座、（3）eラーニング教材の開発の3つの主要な事業を行った。また、事業に付随する、外部英語教育評価委員による提言や担当教員の研修会参加報告も含まれている。 （共著者：＜代表＞藤岡克則、堀口誠信、石崎一樹、三浦秀松） （三浦担当：第5部「実践英語能力のステップアップに最も効果のある方策を模索して」内の「その1：第6回TOEICテストスコアアップ指導者養成講座に参加して」 pp. 48-56. 及び「その3：冬季ELEC英語教育研修会（文部科学省後援）に参加して」 pp. 68-79. を執筆）
11. インターネットを併用した入学前教育を実施するための基礎調査結果	共	2009年9月	徳島文理大学研究紀要 第78号 pp. 137-148.	A0入試の拡大に伴い、入学前教育のあり方が問題になっている。インターネットを利用すれば、課題を提示したり、英語担当教員がウェブカムを通して学生と英会話の練習をしたりできる。入学予定の学生は地元の学生とは限らないが、インターネットを利用すればこの地理的な問題も解決できる。インターネットを活用した入学前教育の可能性を、高校や高校生に対して行なったアンケート結果のデータを基にした調査報告を行った。 《共著者：水ノ上智邦、南波浩史、三浦秀松、清澄良策、松村豊大》 《三浦担当：文章校正、及び、プロジェクト全体への協力・助言》
12. 英語診断テストの結果	共	2009年9月	徳島文理大学研究	指導要領が大幅に変化した教育カリキュラムで学んだ生徒が大学に

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
果分析：2007年度と2008年度入学者の比較研究			紀要 第78号 pp. 159-172.	入学する2006年問題についてすでに報告を行っているが、本稿も同じ問題意識に立って2007年度入学生と2008年度入学生的語彙・文法力を調査分析した。文法は全般的に低下しており、特に品詞に関する問題の正答率が低いことに注目した。他には、語彙と文法問題の正答率の相関は0.65とあまり強くなく、独立して測る必要があることも分かった。 《共著者：三浦秀松、堀口 誠信、石崎 一樹、藤岡 克則》 《三浦担当：全体の執筆、及び、プロジェクト全体への協力と助言》
13. 英語の「学士力」に向けて：英語をe-learning (NetAcademy2)で学習することに対する学生の意識調査報告	単	2009年9月	徳島文理大学研究 紀要 第78号 pp. 121-136.	英語教育の世界でもe-learningの利用は増すばかりであるが、e-learningは人間が相手ではなく、無機的な機械（コンピューター）が相手であるので、学習者がe-learningでの語学学習にどのように感じているのかについて情意的な面をアンケート結果を元に分析し報告した。学習習慣の形成に役立つことも分かり、本報告は、e-learningのより有効な利用に向けての一助になると思われる。
14. 大学英語教育における「2006年問題」の本質：学力低下から学力の多様化へ	共	2007年	徳島文理大学紀要 第73号 pp.55-72.	いわゆる「ゆとり教育世代」が大学に入学してくる年にちなんで「2006年問題」と呼ばれたが、実際に2005年度入学生と2006年入学生で学力にどれほどに違いがあるのか、英語と言う観点から比較考察した論文である。大学独自に開発し実施していた英語力診断テストの結果を比較する限り、当初予想されていた学力の総合的な低下は見られず、低下ではなく、学力の多様化に目を向けるべきではないかという指摘を行った。 《共著者：藤岡 克則、堀口 誠信、石崎 一樹、三浦秀松》 《三浦担当：第4節「本校英語科の実力判定テストによる2006年問題」執筆、及び、プロジェクト全体への協力と助言》
15. 言語類型論から見た日本語と英語--WALSについて	単	2006年9月	徳島文理大学研究 紀要 第72号 pp. 1-9.	世界には6000から7000の言語があると言われており、それらをタイプ別に分類する言語類型論という言語学の分野がある。研究者の努力により2005年にWorld Atlas of Linguistic Structures (WALS ; 『言語構造の世界地図』)が刊行された。その学問上の意義を、從来から言われていた日本語と英語の対照研究を再検証する形で論じている。
16. 日本語の再帰表現における反局所性についてー反換喻性の原理ー（査読付）	単	2004年	『言語研究の接点』（英宝社） pp. 111-124.	日本語では再帰代名詞を単純他動詞文の目的語に用いて再帰表現を形成することができない場合がある。日本語の再帰構文に見られる現象はオランダ語などとはその原理が異なることを示し、次に、日本語は、反換喻性（antimetonymy）に基づく（他）動詞の選択制限によるものであり、再帰構文や再帰代名詞そのものに起因する現象ではないことを論じた。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. There構文の主語について	単	2022年2月11日	同志社ことばの会 年次大会	ほとんどの構文において主語は一つであるが、there構文には主語の特徴を持つ2つの言語要素があるため、その主語を巡って様々な説が唱えられてきた。主語はthereのみ1つであるとするHuddleston&Pullum (2002)の説に対して、同じく主語の性質を持つ2つの言語要素が現れる場所句倒置構文の存在から、there構文の主語を1つであるとする説の理論的意義は強くないことを指摘した。
2. 産学連携によるグローバル人材の育成ー国際業務力からの実践的な英語教育の接合ー	共	2020年2月21日	第4回 研究成果の社会還元促進に関する発表会 口頭発表（武庫女子ーションキャンパス レクチャールーム）（開催場所：兵庫県）	英文では、産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指している。すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスラーニング、企業研修など、「キャリア教育」の各種の取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化しようと研究を進めている。この学生のエンプロイアビリティーを向上させるための取り組みについてこれまでの結果を報告した。 (共同発表者：三宅弘晃、三浦秀松、山田慎人、宇佐美彰規、辻和成) (三浦担当：eポートフォリオ《「学習カードシステム」》執筆担当、及び、プロジェクト全体への協力と助言)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. アメリカ英語の諸英語への影響について	単	2019年6月22日	武庫川女子大学英文学会令和元年春季大会（開催場所：兵庫県）	冷戦終結後アメリカが唯一のスーパーパワーとなり政治、経済、文化といった各分野で影響力を及ぼしてきた。このことがアメリカ英語が世界各地の英語にも影響を及ぼしていることをコーパスのデータを使って10年前と現在との比較をした。
4. 英語の統語的序数について	単	2018年2月11日	同志社ことばの会2017年度年次大会（会場：同志社大学今出川キャンパス）（開催場所：京都府）	英語の序数にthe fifth candidateのような形態的序数とcandidate fiveのような統語的序数が存在することを指摘し、正面から論じられることが多い、後者について考察した。独自の移動分析を提案し、分析が正しければ従来の説の中に否定されるものがてくることを指摘した。
5. 言語学入門 一文法研究の基礎を中心について	単	2012年6月30日	武庫川女子大学英文学会（開催場所：兵庫県）	言語学の歴史と基礎概念の説明を行った上で近年の進展について発表した。特に、チョムスキーを創始者とする生成文法が、一般に考えられている言語学の枠組みを超えて、言語進化の領域にその興味の対象を拡大していることを指摘し、最新の生物学と言語学が融合した生物言語学の動向について述べた。
6. フィンランド・メソッドと日本の英語教育	共	2010年2月11日	同志社ことばの会 2009年度年次大会（会場：同志社大学・寒梅館6階大会議室）（開催場所：京都府）	2009年2月の発表に続き科研費に選定された課題に基づくフィンランドの学校視察（2008年12月）から考察した内容を報告した。視察した各レベルの学校の施設や教員の教育に対する熱意、視察したプレゼンの授業の一つでは司会など全ての授業運営が生徒中心で実施されておりそのようなフィンランドで行われている徹底した学習者中心主義の学習をいかに日本の大学の授業の演習や学内のコンテストで活用できるかについて発表した。 (共同発表者：堀口誠信、藤岡克則、三浦秀松、石崎一樹) (三浦担当：科研費の課題に選定され堀口教授とともにフィンランドの大学を現地視察（2008年12月）、及び、研究プロジェクト全体への協力と助言)
7. 英語学習量再考：韓国とのTOEFL30点差から考える	単	2009年11月21日	JACET九州・沖縄支部（第93回東アジア英語教育研究会）（開催場所：福岡県）	TOEFLの平均得点に関して日本と韓国には埋めがたい点差があり、社会背景の違い、学習動機の違い、指導法の違いなど、その理由には諸説あるが、より単純に、小学校で英語が導入されているかどうかという英語学習量（learning/exposure）の問題ではないかという可能性を指摘した。従来のシステムの中で学習量（learning/exposure）を自主的・自律的に増やすにはどうすればいいか、そもそもそれは可能なのか、こういった学習「量」の問題を中心に考察した。
8. 大学1年生の英語習熟度について	単	2009年6月28日	四国英語教育学会（鳴門教育大学）（開催場所：徳島県）	過去5年間行ってきた英語教育に関する取り組みを報告した。特に、毎年実施している英語習熟度テストから見えてくる入学者の英語力とそれに対してどう対応していくか今後の展望を論じた。特に、過去4年間、異なる年度に入学してくる学生の間に、英語力に関して有意に差が見られるか比較検討を2回行った。2回とも、「低下傾向」は見られるが、こちらも有意な差はみられなかった。英語力は必ずしも低下しているのではなく、英語学習の「多様化」ということが実態ではないかと指摘した。
9. フィンランド・メソッドとプレゼン教育	共	2009年2月11日	同志社ことばの会 2008年度年次大会（会場：同志社大学・寒梅館6階大会議室）（開催場所：京都府）	フィンランドの小学校から大学まで実際に現地視察したその報告を中心とした研究発表を行った（視察した大学：ヘルシンキ大学《大学レベル》・タンペレ大学《大学レベル》・トゥルク大学アウラヨキ高等学校トゥルク市スウェーデン系高等学校《高等学校レベル》・タンペレ大学付属教員訓練学校《中学校・高等学校レベル》・トゥルクインターナショナルスクール《小学校・中学校レベル》）。フィンランド・メソッドは単なるハウツーものではなく、フィンランドの歴史（強國に囲まれ破綻した国家の経済を個々の「生きる力」で集団的に建て直そうとする理念）や文化・社会的な側面（身近な例では、英語圏の映画に吹替版を利用しないが高い英語力の一助となっている可能性）にその背景があることを考察した。 (共同発表者：堀口誠信、藤岡克則、三浦秀松、石崎一樹) (三浦担当：科研費の課題に選定され堀口教授とともにフィンランドの大学を現地視察（2008年12月）、及び、研究プロジェクト全体への協力と助言)
10. 意味的再帰性条件	単	2008年11月	日本言語学会第	再帰構文の表す再帰性には、主語と目的語が表す参与者が一致する

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
("Condition R") 再考		29日	137回大会（会場：金沢大学角間キャンパス北地区）（開催場所：石川県）	意味的再帰性と一致しない近似的再帰性がある。Lidz (2000, 2001)は、意味的再帰性は動詞の語彙レベルで再帰性（語彙的再帰性）がある場合にのみ保証され、そうでない場合は近似的再帰性的可能性が生じると指摘し、意味的再帰性と語彙的再帰性の間には双方向条件があるとしている ("Condition R")。しかし、日本語では語彙的再帰性を持たないと思われる動詞でも意味的再帰性だけが解釈可能で近似的再帰性の解釈が困難な例が存在する。これは、語彙的再帰性は意味的再帰性を保証するが、その逆は必ずしも成り立たないことを示唆している。Lidzの唱える「意味的再帰性の条件 ("Condition R")」は、双方向条件から一方条件へと弱められるべきであることを主張した。
11. Against raising analysis in Japanese: juncture mixture and multiple projections	単	2006年10月1日	University of Leipzig (Leipzig, Germany) (開催場所：ドイツ、ライプツィヒ)	統語論において、ある文が上昇構文なのかコントロール構文なのかというの、数十年の歴史があるトピックである。一見類似の文が背後に異なる統語構造（上昇構文vsコントロール構文）を持つというこの仮説は言語学者を長らく魅了してきている。本発表では、日本語と英語で「上昇構文 (Raising construction)」とされている例を比較し、英語は上昇構文と言えるが日本語は上昇構文とは異なり、コントロール構文として分析する方が妥当であることを主張した。
12. 有声促音の音声特徴に関する一考察	単	2006年8月26日	The Japan Foundation, Toronto (Toronto, Ontario, Canada) (開催場所：カナダ、オンタリオ州、トロント)	日本語には「バッグ」などにみられるように有声促音が存在すると考えられている。有声促音の「有声性」がどのような音響音声学的特徴を持っているかは明確な答えが出ていない。解明を目指して実験を行った。その結果に関する音響音声学的な分析について報告を行った。
13. 日本語再帰表現再考	単	2004年10月9日	表現学会近畿例会（開催場所：奈良県）	日本語では再帰代名詞を単純他動詞文の目的語に用いて再帰表現を形成することができない場合がある。日本語の再帰構文に見られる現象はオランダ語などとはその原理が異なることを示し、次に、日本語は、反換喻性 (antimetonymy) に基づく（他）動詞の選択制限によるものであり、再帰構文や再帰代名詞そのものに起因する現象ではないことを論じた。
14. 日本語に再帰構文は存在するか？	単	2003年11月12日	日本言語学会第127回大会（大阪市立大学杉本キャンパス）（開催場所：大阪府）	サモア語における再帰構文の存否をめぐり学者の間で議論があるが、本発表では日本語にも類似の問題があることを指摘し、「*太郎は台所で自分を切った（てしまった）」のような文に見られる日本語の反局所性(antilocality)の問題を考察した。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. アメリカ英語の諸英語への影響について—2008年と2018年のコーパスデータの比較から見えてくるものー	単	2020年3月	Newsletter (No. 36) Department of English, Mukogawa Women's University	2019年度武庫川女子大学英文学会で行った発表をまとめた内容になっている。冷戦終結後、唯一のスーパーパワーとしてアメリカが政治、経済、文化といった各分野で影響力を及ぼしており、このことがアメリカ英語が世界各地の英語にも影響を及ぼしていることをコーパスのデータを使って示した。特に、10年前の2009年と現在の2019年との比較を中心に論じている。
2. 言語学入門：文法研究の基礎を中心	単	2013年3月	Newsletter (No. 29) Department of English, Mukogawa Women's University	2013年度武庫川女子大学英文学会での発表をまとめた内容となっており、以下が取り上げたトピックである：「1. ことばに関する質問」、「2. 世界の言語の数」、「3. ことばに対する二つの態度」、「4.1 規範文法」、「4.2 記述文法」、「5. Cobuild」、「6. Longman」、「7. 歴史主義」、「8. 構造主義」、「9. 相対主義」、「10. 普遍主義」、「11. 研究手法」、「12. ことばに関する根源的問い」、「13. まとめ」。
6. 研究費の取得状況				
1. インターネットを併用した入学前教育の	共	2008年～2010年	『特色ある教育研究』（代表：松村	A0入試の拡大に伴い、入学前教育のあり方が問題になっている。インターネットを利用すれば、課題を提示したり、英語担当教員が

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
実践			豊大 採択番号20特-1)」	ウェブカムを通して学生と英会話の練習をしたりできる。入学予定の学生は地元の学生とは限らないが、インターネットを利用すればこの地理的な問題も解決できると考え、可能性を調査した。2009年に発表した論文（『インターネットを利用した入学前教育を実施するための基礎調査結果』）で研究結果を報告した。 (共同研究者：<代表>松村 豊大、水ノ上 智邦、南波 浩史、三浦秀松、清澄 良策) (三浦担当：プロジェクト全体への協力と助言、及び、文章校正) フィンランド・メソッドは「○○すれば○○の点数が何点上がる」というような、単なるハウツーものではなく、破綻した国家の経済を個々の「生きる力」で集団的に建て直そうとする理念にまで直結する歴史的な背景があることを考察した。考察結果を日本の英語教育に最大限導入すべく、コミュニケーション力・読解力などを再認識する説明手順を整え、特に英語で行うプレゼンテーションにおける採点基準をある程度まで確立し、授業の演習や学内のコンテストで活用した。 (共同研究者：<代表>堀口誠信、藤岡克則、三浦秀松、石崎一樹) (三浦分担：代表の堀口教授とともにフィンランドの学校を小学校レベルから大学まで現地視察（2008年12月）、及び、研究プロジェクト全体への協力と助言、2009年2月・2010年2月報告論文共同発表、報告書文章校正)
2. フィンランド・メソッドを取り入れた英語プレゼンテーション能力育成法・評価法の確立	共	2008年～2010年	科学研究費（研究課題/領域番号：20530870；研究種目：基盤研究(C)）	
3. TOEICを有効活用した自律学習支援のための英語教育プログラムと学習到達度評価システムの開発	単	2007年4月	『特色ある教育研究』（代表：三浦秀松 採択番号：20特-301）	アルク社のeラーニングソフト「Net Academy」を利用して、学生の英語学習量の増大を図った。教養の英語科目で、スケジュールを設定し、毎週一定量の学習を行わせ、期間最後にはアンケートを実施した。研究結果は2019年に発表した論文で報告を行った（『英語の「学土力」に向けて：英語をe-learning (NetAcademy2) で学習することに対する学生の意識調査報告』）。
4. 日本語・韓国語・英語およびその言語文化・言語教育に関する対照研究	共	2007年～2009年	『特色ある教育研究』（代表：篠田裕 採択番号：19共-211）』	語学と文学を専門とする研究者が、日本語・韓国語・英語に関連するトピックについて共同で研究を行った。研究論文は各自で執筆を行い、成果は2010年に発表した論文集で結実した（『交流は海峡をこえて—文化と文学、そしてことばー』）。私自身の研究結果は同書所収の論文（第7章『英語・日本語・韓国語に見られる單文再帰構文の対照研究』）で発表した。 (共同研究者：<代表>岡地ナホヒロ、上田穂積、石崎一樹、中島正太、片茂鎮、堀口誠信、三浦秀松、近藤政行、篠田裕) (三浦分担：研究プロジェクト全体への協力と助言、及び、研究論文集『交流は海峡をこえて—文化と文学、そしてことばー』の第7章『英語・日本語・韓国語に見られる單文再帰構文の対照研究』を担当)
5. コンパクトシティ教育拠点構想における実践英語能力ステップアッププログラム	共	2007年～2009年	文部科学省社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託プログラム（整理番号1335）	英語のスキルを自主的に維持向上する努力は、中学校・高等学校の英語教員や塾や一般的な機関で英語を教える教員に当然求められている。さらに、英語教員以外の一般社会人でも、いったん学校教育を修了してからまた英語学習を再スタートしたいと考えている人は多い。このような状況にも関わらず、英語教員または一般社会人に対する包括的な英語リカレント教育を提供する場所は存在しないと言ってよい。本学はコンパクトシティ教育拠点となるべく、実践英語能力のステップアップを望む社会人に対して、さらに高度な知識と技術を習得するための機会を設ける。具体的には、(1) 同時通訳訓練法の習得を希望する現役英語教員・教員志望者または一般社会人を対象としたプログラム、(2) 英語運用能力の向上とTOEIC（トイック）での高得点取得をめざす現役英語教員・教員志望者または一般社会人を対象としたプログラム、(3) 英文法を基礎から学び直すために時間と場所を有効に用いる方策としてポッドキャッティングを効果的に利用したEラーニング教材の開発と提供、の3種類を実施した。 (共同研究者：<代表>藤岡克則、堀口誠信、三浦秀松、石崎一樹) (三浦分担：同時通訳講座・TOEIC講座・英文法学び直し講座の企

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
				画・運営・実施、及び、プロジェクト全体への協力と助言、事業報告書作成、報告書文章校正)
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2025年2月16日	同志社大学「ことばの会」2024年度年次大会研究発表司会			
2. 2019年5月18日	日本比較文化学会第41回全国大会・2019年度日本比較文化学会国際学術大会研究発表司会			
3. 2016年2月11日	同志社大学「ことばの会」2016年度年次大会研究発表司会			
4. 2012年4月～現在	武庫川女子大学英文学会『Mukogawa Literary Review』査読委員			
5. 2012年4月～現在	日本比較文化学会『比較文化研究』査読委員			
6. 2011年11月27日	大学英語教育学会（JACET）関西支部40周年記念大会開催校（武庫川女子大学）実行委員			
7. 2010年4月～現在	日本比較文化学会 広報委員			
8. 2006年4月～2010年3月	日本比較文化学会中四国支部理事			